

外郭―向根古谷―

本城の南方台地、向根古谷に構築された外郭は、小さな郭と大規模郭の二郭で形成されている。小郭の周囲は空堀により区切られるが、大規模郭の周囲は崖により囲まれ、郭内には区画された跡はみられない。外郭で特徴的なのは虎口の土橋の幅が広く、空堀の規模も大きい。土塁が高く上面の幅も広く設けられ、虎口からの侵入者に高い位置から横矢をかけると共に、前面に対する掃射の範囲を広げている構えなどで、ここにも築城術の変遷を見ることが出来る。荒上を本城に取り入れた後、サイドの拡張により外郭として整備されたものと考えられる。

「妙見実録千集記」（『房総叢書』所収）に「千葉第廿八代、親胤（略）此ノ代有所以、本城ノ南ノ方ニ小城ヲ築クト云へり。」と記載されているが、この向根古谷の虎口への築城を示すものと思われる。『成田名所図絵』の「本佐倉村千葉家故城址之図」には、向根古谷の虎口が本佐倉城の大手であるとしている。また、本佐倉地区に「向根古谷の台地」と奥ノ山に吊り橋が架けられていた」と伝承もあるからして、向根古谷から本城へ通じる通路として、当時湿地であった中池付近に、取り外しのできる板橋のようなものが架けられ、往来できるようになっていたものと考えられる。